

第1.1節 濱田庄司（その1）

2022年04月 第51号

1.1.1 濱田庄司の略歴

濱田 庄司（はまだ しょうじ、1894年(明治27年)12月9日～1978年(昭和53年)1月5日、本名象二）は、主に昭和に活躍した日本の陶芸家です。神奈川県橘樹郡高津村（現在の川崎市）溝口の母の実家で生まれました。その後、東京府立一中（現東京都立日比谷高等学校）を経て、1913年（大正2年）、東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科に入学し、板谷波山に師事し、窯業の基礎科学面を学びました。

1916年(大正5年)に卒業後京都市立陶芸試験場で釉薬について研究し、柳宗悦、富本憲吉、バーナード・リーチの知遇を得ました。

1920年(大正9年)帰国するリーチとともにイギリスにわたり渡り、1924年(大正13年)に帰国。1930年(昭和5年)から栃木県益子町で作品を作ることになりました。

1955年(昭和30年)重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、1964年(昭和39年)に紫綬褒章を、1968年(昭和43年)には文化功労者。文化勲章を贈られました。

1977年(昭和52年)益子参考館を開設し、自ら回収した日本国内外の民芸品を展示しました。83歳で益子でなくなりましたが、お墓は高津区の宗隆寺にあります。なお作品の一つが大山街道ふるさと館に通年展示されています。

濱田庄司が生まれ育った故郷は、大山街道の宿場町として栄え、矢倉沢王冠の宿場町として発達してきた高津区溝口です。東海道の裏街道として、雨乞いのために大山阿夫利神社に参詣する人たちが往来し、表街道を通れない外人や女性が良く利用した街道でした。

閑話休題 溝口（公的な町名）は南北に細長い川崎市の中央部にあり、副都市の機能を持っています。地元では略称「のくち」がよく使われ、駅前再開発ビル「NOCTY」の名称の由来にもなっています。

ここでは、濱田庄司の作品に込めた熱い志と、思い出の人からの印象話をとりあげます。夏目漱石の講演会にも関わります。

1.1.2 濱田庄司の信念と人柄

「良い芸術とは何か？ 使い勝手がよく丈夫で長持ちし、使って喜びが感じられ使って気持ちが良いもの、一言で言えば、健やかなもの」という、「良い芸術品」としての美の理想の最高段階と「丈夫で長持ち」という実用性の究極のメリットとの「バランス」を図るために、極端に平衡感覚を追い詰めながら、後述する「内発的な人間活力」を強く受け止めた人と言えるでしょう。

このバランス感覚があったからこそ、濱田庄司は何回も意見を変えることが出来ました。濱田庄司の偉大さは、これだけのことをやり遂げながら自慢することなく、誰とでも分け隔てなく語らい、それでいて品位を落とすことが有りませんでした。食欲を中心とした人生設計は英国に渡っても変わりませんでした。英国での食欲は、ただ食べればよいという食欲の充足からいかに美味しく、美しく食べるかという食べ方の文化について考えさせられ、食器への関心がますます強まって、従来の日本人の食文化についての考え方を根本から変えることになりました。濱田庄司の従弟の大田良海は、高津小学校を濱田庄司より1年遅れて入学卒業して、高津尋常高等小学校に進み、太田医院を継ぐため、

第一高等学校から九州帝国大学医学部を卒業しました。この太田医院は濱田庄司の生家で、溝口の片町に有りましたが、現在は駐車場になっています。

中学生の濱田が江戸時代から続く老舗の和菓子屋「大和屋」に帰る時、濱田の弟の和男が大田良海の自宅でダダをこねていると、小学生の和男に諄々と1時間でも2時間でも説教をしました。「お前そんな勝手なことを言っていてダダをこねたりしちゃいかんぞ」と言いな、でも怒鳴りつけるようなことは決してしないで、諄々と説くのです。すると先方は、怒る張り合いもなくなり、大きな目から涙をぽろぽろこぼしながら、黙って聞いていて、今度はおとなしくなって遊びだすことがあったそうです。



右手の神奈川県高津県税事務所
現在の大山街道ふるさと館

1.1.3 夏目漱石とバーナード・リーチ

濱田庄司は1914年（大正3年）1月、東京高等工業学校2年生の時、夏目漱石の講演を聞いています。漱石は2、3年前から頼まれていたものを十数回断ったあげく、この年になり明治44年頃のテーマが原点の講演を行いました。つまり「無題」と題されたこの講演は、1911年（明治44年）8月に和歌山で行われた有名な「現代日本の会」の延長線上にあるものでした。「現代日本の開花」の中で、漱石は「開花は人間活力の発現の経路である」といい。「人間活力」とは人間の生きようとする力、人間の想像力、人間が自分を解放してゆく力と考えている様です。大事な事は子の開花に絶望した漱石が、丁度花が開く様に自ずから蕾が破れて、花弁が外に向かうように、内から自然に出て発達するのを内発的と言っていることです。漱石が講演で伝えたポイントは、「節約せんとする吾人の努力」「活力を消耗せんとする趣向」が開花の活用方法です。漱石は、いわゆる文科系と理科系という風に、大きな二つのジャンルに極端に分けて説明をしたそうです。人間はそうそう極端に分類が出来ません。

「丁度花が開く様に自ずから蕾が破れて、花弁が外に向かう」姿になるにはどの様に実をつけていくか、若い濱田庄司は大変な問題に突き当たり、自分なりに真剣に考えざるを得ないことになりました。英国をはじめとするヨーロッパやアメリカの先進国と極東の島国との距離や文化的な落



濱田庄司とバーナード・リーチ

差をどの様に縮めるかを考える宿命を負いました。

第1章 川崎ゆかりの人

大事なことは、単なる陶芸ではなく、日本人の血の中にこそ「ほんとうの伝統」があるから、「あわてることは何もなく、本当に好きなことを、変な欲にからまないでやれば、私はいいんじゃないかと思うようになりました」と日本人の血の原点に立ち返って、日本と日本人への伝統の回帰と再発見に辿り着いた点です。「伝統が自分の血の中に生きていとすれば、必然、伝統に忠実であります、形にこだわることはなく、いよいよ自由です」と回想しています。

こうして、後にバーナード・リーチとの出会いから、英国と英国人の芸術に接近し、じかに学ぶという偶然にしても、濱田庄司の姿勢はおそらく謙虚でひたむきだったので、リーチも濱田庄司と親しくならざるを得なかったのです。この様な考え方で陶作に集中すると、後年の「用の美」という、民衆の、民衆による、民衆のための芸術の創造、つまり「民衆のための芸術」である「民芸」にたどりついたのでした。

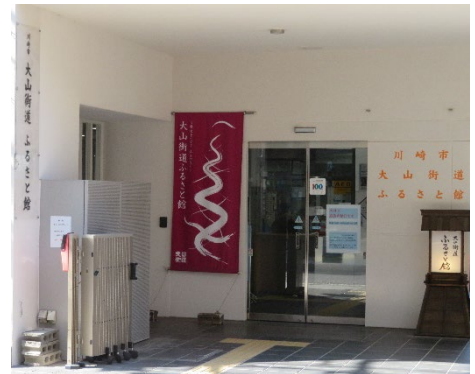
濱田庄司について語るときに各務鋼三（かがみこうぞう）、河合寛次郎、柳宗悦等忘れてはならない人も居りますが、この辺で筆を置かせていただきます。



展示



宗隆寺本堂



大山街道ふるさと館

ふるさと館常設



宗隆寺山門



濱田家の墓（未確認）

人生を豊かに(雑学のすすめ)

女優 赤木春恵が残したことば

国民的ホームドラマ『渡る世間は鬼ばかり』『3年B組金八先生』『藍より青く』など数々のドラマや舞台に出演し、名脇役として光っていた赤木春恵さん(1924年3月14日-2018年11月29日)が心不全で亡くなりました。2013年の映画『ペコロスの母に会いに行く』で、世界最高齢での映画初主演としてギネス世界記録に認定されたのは記憶に新しいことです。

娘の野杵 泉 (のいり・いずみ) さんによる1500日に及ぶ母の介護生活の話に心が打たれます。以下は『大丈夫、なるようになるから。』 著者／赤木春恵、野杵 泉 (株式会社世界文化社を参照) からの抜粋です。

孫娘に、「自分の仕事を大事にして下さい。仕事は必ず自分を助けてくれます。人生は、自分との闘いです(人との闘いではなく)。生活は毎日、自分と闘いながら過ごすものです。自分の人生を大切に。流れに逆らわずに」

泉さんには「泉(娘)、最後まで付き添って暮れてありがと。大丈夫よ、どんなに大変な事があっても、いい時が必ず来るから。元気でいてね。お願いよ。」

孫息子には、「俳優を続けるのは、いばらの道。うまくいかなかった、思うようにいかなかった、決してあせらないこと。諦めないこと。そのために、日頃から準備だけはちゃんとしておきなさい。準備なしで、花開くことはないから」

そして自身については「自然と、命が終えるように死にたい」「チューブにつながれて命が永らえる、というのだけは嫌」

森繁久彌からの言葉は、「白い壁も近くで見ると傷があったり、ムラがあったり、塗り残しがあったり。でも、遠くから見て白かったら、おおむねよしとしよう。考えすぎちゃダメ」

耳寄り情報

ビリギャルの講演会

実話を基にした映画「ビリギャル」のモデルとなった小林さやかさん(米の一流大・コロンビア大の大学院へ合格)の講演会を聞きました。成功のポイントは以下の12点です。

- ① わくわくする目標を設定する。
- ② 何のために勉強するのか
- ③ 誰の為に勉強するのか。
- ④ 自分で考える。他人に自分の考えを伝える能力が必要。
- ④ 根拠のない自信を持つ。周囲は結果しか判断をしない。勉強した経験が大事。
- ⑤ 自分の目標に挑戦する。
- ⑦ 自己肯定感を持つ。
- ⑧ 具体的な計画を立てよう。小さな成功の積み重ね。
- ⑨ 目標で夢を公言しよう。毎日の刷り込み。ピグマリオン効果一期待を込めれば、人は伸びる。
- ⑩ 憎しみをプラスの力に変える。 憎しみが一番強い力。
- ⑪ コーチングで相手の能力を引き出す。 ⑫ 功自体をほめる。

皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。

第1.2節 濱田庄司（その2）

2022年10月 第57号

2022年4月 第51号が好評のため、今回は濱田庄司の5男能生（よしお）が父濱田 庄司についての思い出のインタビューです。

ガラス工芸家濱田能生（1944-2011）は1969年から3年間イギリスの王立美術大学（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート）工業硝子科で学び、帰国後は栃木県鹿沼市に築炉創作を続けました。瑠璃や銀黄のガラスを基調にした濱田の作品は、全体にゆるやかな曲線と量感をそなえ、陶表現を伴う創意にあふれています。

1.2.1 お風呂の思い出

子供の時の思い出として、小学校に入るか、入らない位の時、入ってからも含めてですけど、なにしろお客さんが多い家だったものですから、夕ご飯のあとにお客さんとお会いすると、囲炉裏でいろんなよもやま話をしているうちに、僕が眠くなっちゃう訳ですね。そうすると「ちょっと失礼します」といって、これから能生（よしお）を風呂に入れて寝かしつける。僕は親父が50歳の時に生まれた、末っ子なもんですから。一番別れるのも早い、まあ少しでも長くいられるようにということで、一緒に風呂に入る。どれがどっこい風呂で遊ばせてくれるんです。



濱田能生 瑠璃硝子口透花瓶（Yahoo Japan より）

1.2.2 父と子

親父は寝るのが達人で寝るのが早いんです。で、どこそこのばか話とかいうネタ本が有って、これを親父、古本屋さんから買っというてそいつの内容を話してくれるんですけど、これがまた滅法面白い。

そんなばか話をしてから寝かしつけてくれんですけど、面白いから子供なんか寝やしないでしょう。親父の方が先に寝ちゃう。

あと鉄道唱歌なんかも歌ってくれた、子供のリクエストで軍暗マーチなんかやってもらった記憶がありますけどね。

1.2.3 父の信条

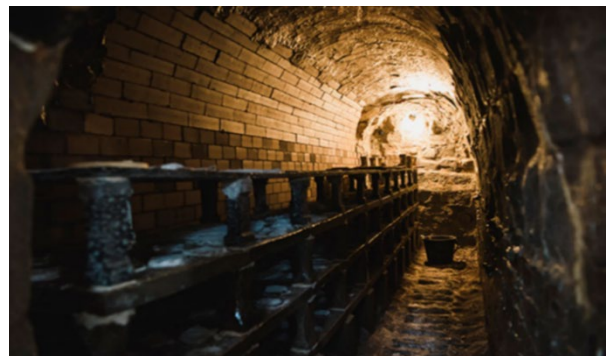
どこに行っても、話す内容というのは似ている。これは、親父にとって一番みなさんに知っていたきたい事を、父は何回も何回も話したんだと思う。してみるとそれは、それが具体的になんだといわれると頭抱えるところがありますが、潜在意識みたいなもので、いつだって同じ話しているので、頭にこびりついている。今に至るも僕にとって、何かの決断をするとき、右か左を決める時に、それは大きく役立っている様な気がします。もしくは、こういう時に親父だったらどっちに判断するだろうな、そうするっていうと深読みするとその逆あたりやっときゃ面白いとか、そんなことがあったり。

1.2.4 父の原点

溝口には、生まれ、且つお墓がある。お墓が（益子ではなく溝口に）あるのはすごいですね。あの親父の本にもどっかにかいてありましたよね、どこそこで生まれて、英国でどうして、そして益子でどうして、それで自分が入ったお墓の事は当然書いてないんですけど。ここにお墓があって、そこに入ったということがすべてを物語るだろうし、それじゃ簡単すぎるけど、それが最大限の意義だろうし、彼が非常に豊かな校友関係を作り、豊かな仕事をしたと思うし、そういう思想信条を育んだ土地、今は本当、僕らも含めて皆の生き方がセコクになった。

雄大な夢、自分の人生に自分で白い地図に色を塗っていった生き様というものを見られる、感じられるような施設が出来たら。特に、若い人達、子供たちになにかしら自分の大きな夢を作ってもらいたいなと、そういうための施設になってくれたら極めて嬉しいなと思います。

それに比較してそのような秀作群に対して、一体その地元・川崎でどういうものを見せられるのかな、ということになるでしょうけど、これはやっぱりその数は少ないだろうとは思いますが、まず超初期のころがまず存在する。これは、ほかの民芸館にはないですから。そういう出発点、彼のいきざまを作った一番最初の影響を受けた物が、どういう風に変化して行くかという時に、本当は一番先に川崎に見に行かなくてはいけない場所なんです。幸いにも川崎にそういう美術館が出来るとすれば、例えばその作家の仕事を見たい、勉強してみたいという人がいたら、まず最初に川崎を訪れるべき存在。で、それから民芸館、大原美術館を見て、なるほどと納得がつくことでしょう。



（濱田庄司登り窯外観とその内部）（写真：yahoo Japan より）

耳寄り情報

ビリギャルの講演会

実話を基にした映画「ビリギャル」のモデルとなった小林さやかさん（米の一流大・コロンビア大の大学院へ合格）の講演会を聞きました。成功のポイントは以下の12点です。

①わくわくする目標を設定する。 ②何のために勉強するのか。 ③誰の為に勉強するのか。 ④自分で考える。ロボットではなく、他人に自分の考えを伝える能力が必要。 ⑤根拠のない自信を持つ。周囲は結果しか判断をしない。勉強した経験が大事。 ⑥自分の目標に挑戦する。 ⑦自己肯定感を持つ。 ⑧具体的な計画を立てよう。小さな成功の積み重ね。 ⑨目標で夢を公言しよう。毎日の刷り込み。ピグマリオン効果一期待を込めれば、人は伸びる。 ⑩憎しみをプラスの力に変える。 憎しみが一番強い力。 ⑪コーチングで相手の能力を引き出す。 ⑫功自体をほめる。

第1.3節 浅野総一郎

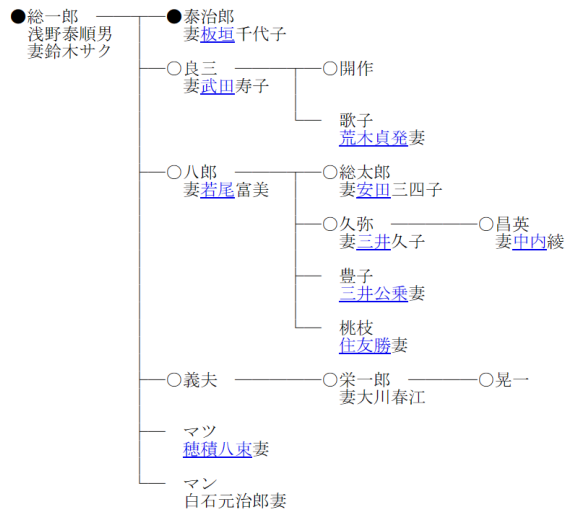
2024年2月 第73号

1.3.1 字名は損一郎

今回は「浅野総一郎と京浜工業地帯」（東 秀紀氏）を参考に、お話しします。浅野総一郎は1948年（嘉永元年）、現在の富山県氷見（ひみ）市で町医者の子供として生まれました。医者を継ぐのが嫌だった総一郎は、若い頃から加賀の豪商銭屋五兵衛に憧れて商人を目指しました。

この様な大志を抱く人間に、幕末とはいえ古い秩序の残っている富山の一地方でささやかで安定した一生を送ることは望むことはありませんでした。総一郎は、織機業、醤油醸造、稲扱（こ）機販売業と、次々に新しい商売に手を出しますが、すぐ夢が広がりすぎて、ことごとく失敗して養家から追い出されました。「総一郎ではなく損一郎」と呼ばれたのです。

浅野財閥、浅野セメント（太平洋セメント）創業家。



（浅野総一郎）

1.3.2 夜逃げの総一郎

富山から夜逃げした総一郎には、商売を始めようにも、元手が有りません。そこで、農家で捨てている竹の皮を仕入れて、ものを包む容器として売る商売を始めました。総一郎にとっては初めての商売の成功でした。総一郎は竹の皮から薪炭へと扱い品目を増やした頃に目にとめたのは、石炭を納めている役所や工場で見た処理に困って山積みにし、穴を掘って埋めていた石炭の廃物であるコークスやコールタールです。竹の皮で得た「世の中に不要なものはない」という教訓を生かし、技術者を雇って検討を加え、コークスを燃料として再利用や、コールタールから石炭酸を取り出して、コレラの消毒薬にして販売することに成功しました。かつての損一郎は、「廃品利用の天才」と呼ばれ、資源のリサイクルの先駆者になりました。

王子製紙の工場からコークスを引き取ったことがご縁で、総一郎はそこで社長をしていた渋沢栄一の家に招かれました。当時渋沢は大蔵省を辞職して野に下り、実業界の向上・発展に専心していました。渋沢は第一銀行や手形交換所は、近代化に重要な事業であるとして、日本橋をベニスの様な水の都として金融の中心地とする都市づくりを構想していました。渋沢の民間人として長期的視野で進む渋沢に強い感銘を受けた総一郎は、東京ガスの創立や三菱と争って敗れた丸の内地区の払い下げ、そして東京湾埋立等の数多くの事業に関係することになったのです。

一方渋沢は、豪放な性格の総一郎に、自分にはない工業経営の実務的才能を見て、友人として魅力を感じていました。物づくりの精神こそが、大きな夢を描きながら、長期間知恵を絞って努力し、従業員と共に一心に働く総一郎の資質に近いものでした。数多い渋沢に事業の内、今も残るのは、セメント、電機、鉄鋼、造船といった工業が多いのです。

1.3.3 赤猫とセメント

総一郎が最初に取り組んだ工業は、セメントでした。当時、工部省の深川セメント工場は、大量の赤字を出して操業停止になっていましたが、総一郎は渋沢にこの「廃品」の払い下げの口をきいてくれることを頼みました。セメント事業の将来性に疑問を呈した渋沢に、総一郎は東京に出てきた頃聞いた「赤猫」という言葉の説明をしました。「赤猫」が江戸の名物である火事の意味と知り、総一郎は建築の不燃化で東京を安全な都市に出来ないかと痛切に思ったのです。東京の最初の本格的都市計画である「市区改正」の審査会委員を務め、その重要な使命が防災であると認識していた渋沢は、この言葉に強く動かされ、払い下げは実現しました。競争相手の三井や三菱はセメント事業ではなく、不動産事業として申請していました。

総一郎は払い下げが成功すると、工場の一角に家族で引越して、毎朝従業員を門で出迎え、一日中彼らと一緒に身を粉にして働きました。単に土地の有効利用だけでなく、実際に事業を起こす「実業」の姿勢は、後の京浜埋立にも引き継がれました。

1.3.4 勤儉堂主人と京浜埋立事業

セメント会社の資金援助を頼んだことから、総一郎はもう一人の経営上の師に出会いました。それが「勤儉堂主人」と称して吝嗇漢(りんしょくかん)を自認し、寄付はしないことで有名であった銀行家安田善次郎です。彼は富士銀行(現：みずほ銀行)、安田火災(現：損保ジャパン)等の創始者の一人ですが、「寄付すれば男爵にする」と政府から言われた時も、即座に断ったそうです。しかし、安田は官の圧力で理念のないもの寄付するのは大嫌いでしたが、社会的に意義がある大きな夢には、惜しげもなく金を注ぎ込む合理主義者でした。その安田が見込んで、「資金が丸潰れになっても悔いはない」と徹底的に援助したのが、後藤新平の東京改造計画と、総一郎の京浜埋立事業でした。総一郎は、渋沢ほど高い社会的理念を持っていたわけではなく、安田の様な蓄財の才能が有ったわけではありません。大きな夢に邁進することで事業を成功させる才能とエネルギーが有りました。



1.3.5 ロンドンのドッグランズと防波堤

総一郎は欧米の海軍事情の視察に出かけ、欧米の港湾、とりわけロンドンのドッグランズ港の壮大さに動かされました。帰国後の1897（明治30）年、総一郎の構想は大型船停泊が可能な横浜港の改築と東京湾の新設でした。ユニークな点は、単に港だけではなく、その両港を結ぶ航路の沖合に防波堤を建設し、堤と陸地の間の海底を掘削して、大型船の運河を建設することです。海外から横浜に運び込まれる貨物は、舁（はしけ）で消費地の東京に海上輸送されていましたが、輸送費も膨大で、防波堤が無く海難事故が多発していました。

総一郎は品川沖21万坪の埋立を東京府に申請しましたが、10年以上に渡る数度の申請は「こうした大規模な事業は民間に行わせるべきではない」と握り潰されました。そこで、総一郎は安田と共に多摩川から鶴見川までの延長4500mの地帯を調査しました。この時安田はすでに80歳に近かったのですが、川崎の海辺の宿屋に3日3晩泊まり込み、朝は6時に海岸へ出て潮の引き具合を調べ、夕刻5時から60歳の総一郎と一緒に釣り船に乗って魚を釣りながら、潮の満ちる様子を観察したそうです。

1908（明治41）年、総一郎は安田善次郎、渋沢栄一らと鶴見埋立組合を設立、この地に150万坪（495ヘクタール）の埋立を行うことを出願しました。神奈川県の出願が下りて着工したのは、その2年後でした。当時は荒れ果てた海岸でしかなかった京浜臨海部が、やがて世界的な工業の中心になることを、総一郎は見通していたのでしょう。

1.3.6 東亜建設工業とJFEスチール他

総一郎の開発の特徴は、単に埋立地を分譲して不動産事業として儲けるだけでなく、土地の半分ほどを工業を中心とした事業展開につなげました。埋立の為に建設会社を自前で作り、総一郎が経営に関係した電力、ガス、電機、鉄鋼、造船等の工場を、埋立地や隣接地に立地しました。最も代表的なのは、総一郎の女婿である白石元治郎が、岳父の支援の下、民間による製鉄を目的として、1912（明治45）年に設立した日本鋼管（現：JFEスチール）です。

交通では、物流と従業員の通勤の為に鉄道を敷き、現在のJR鶴見線の駅名が「浅野」や「安善」（安田善次郎）「武蔵白石」（白石元治郎）「扇町」（扇は浅野の家紋）等京浜埋立の功労者達にちなんでいるのは、その名残です。その他、臨海部と内陸部を結ぶ南武鉄道（現在のJR南武線）や、品川と横浜を結び、京浜地区を南北に縦断する京浜急行の経営にも参加しました。更に、総一郎は労働者の為に病院・住宅を建設し、京浜工業地帯を見下ろす子安の高台に、技術者を養成し、公立学校より授業料の安い教育機関として、現在の浅野学園を創立しました。晩年には、京浜地域があまりに生産機能に偏重したことを反省し、川崎を当時の浅草の様な盛り場にしようと、100万坪の大遊園地や、宝塚の様な女優の学校を持つ劇場、レストラン、実用品ばかりを売る百貨店等を計画していたそうです。

1.3.7 食道癌と事業の鬼

総一郎が80歳の時、千葉沖で新たな埋立を計画していましたが、昭和初期のニューヨークの株価大暴落の影響で京浜の埋立地も大量に売れ残りました。積極経営で有名な金子直吉率いる鈴木商店も倒産したので、息子たちは総一郎を経営から引き離す為、1930（昭和5）年5月、欧米諸国視察の旅に出すことにしました。



(画像は Yahoo Japan から引用)



鶴見臨港鉄道浅野駅 大正14年
鶴見臨港鉄道株式会社蔵

人生を豊かに（雑学のすすめ）

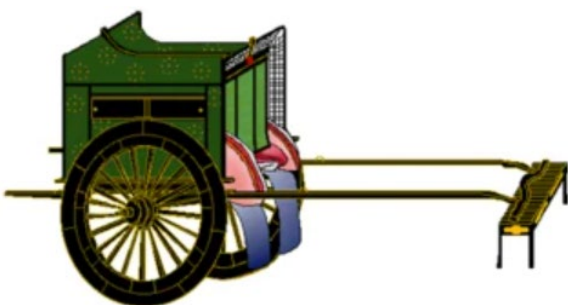
【垣間見る「出衣」「打出」「押手」とは？】

「源氏物語」が描かれた時代、貴公子らが女性にじかに対面出来るのは、親、兄弟のほかは、夫または恋人だけであり、そのため、まだ恋人になっていない男性が女性の邸を訪ねても、御簾屋記帳などを隔てて容姿を見ることなく話をする（女房がとりつぐ）ことになります。

それでは男性は何に基づいて、女性の好みを判断したのかという疑問がわきます。その様な状況では、女性の側は裾の重なりや袖の一部を御簾などの外へ出して、自らの衣装の美しさを垣間見せたのです。そのことを「出衣（いだしぎぬ）」「打出（うちいで）」「押手（おしいで）」といいます。

「出衣」は牛車で外出する際に、車にかけた簾の裾から袖などの衣装の一部を出して、まるで牛車を飾る様にすることです（出車ともいう）。また、宮中などの行事に招かれた際に、御簾の内側に座して、裾の一部を外に出しておくことを「打出」といい、袖の一部を出すことを「押手」といいます。あるいは、「打出」は御簾に対して横向きに座り、袖と褌（つま）を出してみせ、「押手」は正面向きに座って御簾から袖のみをだすという説もあります。

高貴な女性は、自邸でもくつろいでいるおりにも、几帳や御簾のうしろにいて、外から容易に見られない様にしています。そうしたときに、御簾や几帳のすみに女性の衣装の襲（かさね）の色目が打出されていて、その色相が今の季節にふさわしい色襲（いろがさね）であれば、男性らはセンスのいい女（ひと）と想像して文（ふみ）を出して交際の手立てがとられるのです。



（出衣）



(打出)



(「源氏物語」の色辞典 吉岡幸雄 紫紅社より)

耳より情報

こどもへの哲学

最近、思いやりや優しさについての違いで、興味ある会話に出会いました。大事ななのは、人が何か困ったらその困難を除く事であって、それに思いやりが伴っているかでは無いそうです。たとえば気が進まなくても、しぶしぶでも、そうすべき事なのだそうです。すべき事が何時でも出来るとは限りません。大切なのは、他人の立場からも物事を見ることで、想像力が必要になります。自分のすることが人にとっては、どの様なことになるかを見極めて、人との関係を築き上げることが作法（マナー）なのです。つまり作法の本質が他人への配慮となります。

でも、この配慮と優しさとは異なります。優しさは必要ですが、心からの優しさは、自分から望んだことで、仮に相手に何の役に立たないとしても、この優しさは誰にもそれを要求したり、強制することが出来ないから素晴らしいのです。注意することはその表現の仕方、優しさをあまり追及するとニセモノに見えたり、目立ちがりやでお節介に思われてしまうことです。逆に意識しないようにすると、相手の大事なことで手抜きになりがちです。

結果として、「人に優しく出来ない人間」なら、その人生は欠陥が有ります。人との関係で自分がしたことは、自分の心の中にも何かを残します。他人はどうでもいいと手抜きの行動をすると、手抜きの習慣が出来ます。自己イメージも人間らしい感情も、はっきりと変わり行動に影響します。相手の手助けが出来るのにその様にしないのは、ある時からあまりに自己中心に考えてきたからで、自分の行動で自然に相手に接すれば、他人に手抜きをしないで考えての行動が、今の思いや感情が豊かだからでしょう。